

次の文章は五歳の藤原仲忠が母のために食べ物を求めて山中を歩きまわる場面である。

かく遙はるかなるほどをし歩ありくも苦しう覚えて、「いかで

この山にさるべき所もがな。近うて養はむ」と思ひて、

山深く入りて見れば、いみじういかめしき杉の木の、四つ物を合はせたるやうにて立てるが、大きな屋のほどに空き合ひてあるを見て、この子の思ふやう、「ここにわが親を据ゑ奉りて、拾ひ出でむ木の実をもまづ**参らせ**

ばや」と思ひて寄りて見るに、いかめしき牝熊めぐま、牡熊をぐま、

子を生み連れて棲すむ空洞うつほなりけり。出で走りて、この子を食はまむとする時に、この子のいはく、「しばし待ち給へ。まろが命絶ち給ふな。まろは孝の子なり。親はらかなもなく使ふ人もなくて、荒れたる家にただ一人住みて、まろが参る物にかかり給へる母を持ち奉れり。里にはすべき方もなければ、かかる山の木の實かづら、葛の根を採りて親に参らするなり。高き山、深き谷を下り登りまかり歩いて、**朝にまかり出でて暗うまかり帰るほどだに、う**

しろめたう悲しく侍れば、かかる山の王棲み給ふとも知らで、この木の空洞に母を据ゑたてまつりて、薯いもひとすぢを掘り出でて、まづまゐらせむ。

また、遠き道をも親のためにとまかり歩けば、苦しいもおほえねど、つれづれと待ち給ふらんと悲しう侍れば、

近くと思う給へて見侍りつるなり。**むなしくなりなば親**

もいたづらになり給ひなむ。おのが身のうちに親を養は

むに用無き所あらば施せし奉るべし。足無くはいづくにか

歩かむ。手無くは何にてか木の実、葛の根をも掘らむ。

口無くはいづくにか魂通はむ。腹、胸無くはいづくにか

心のあらむ。この中にいたづらなる所は、耳のはた、鼻

のみねなりけり。これを山の王に施し奉る」と、涙を流

して言ふ時に、牝熊、牡熊、荒き心を失ひて、涙を落と

して親子のかなしさを知りて、二つの熊子どもを引き連

れて、この木のうつほのこの子に譲りて、他峰こに移りぬ。

こんなに遠い道のりを（食べ物を探し求めて）歩き回るのもつらく思われて、「何とかしてこの山に（母を養うのに）ふさわしい場所があったらよいのに。」そばにいて（母を）養いたい」と思つて、山深く入って探すと、非常に大きな杉の木で、四本物を合わせたように立っている木（の根本）が、大きな家ぐらいに空いているのを見て、この子が思ったことには、「ここに私の親を住ませ申し上げて、拾ってきた木の実をまず差し上げたい」と思つて、近寄ってみると、恐ろしい牝熊と牡熊が子どもを産んで一緒に住む洞穴であったのだよ。（熊が）走り出て、この子を食おうとする時に、この子が言うことには、「しばらく待ってください。私の命をお断ちになるな。私は親孝行な子である。親兄弟もなく使用人もいなくて、荒れた家にたった一人で住んで、私が差し上げる食べものに頼っていらっしやる母を持ち申し上げている。人里では生活の手立てがないので、このような山の実や、葛の根を採って親に差し上げるのだ。高い山や、深い谷を降りたり登ったり歩き回って、朝に家を出て暗くなってから帰ることでさえ、母が気がかりで悲しいですので、このような山の王が住みなさっているとも知らないで、この木の洞穴に母を住ませ申し上げて、芋一本を掘り出しても、まず差し上げよう（と思つて近寄つたのだ）。また、遠い道のりでも親のために（食べ物を手に入れよう）と思つて歩き回るのだから、つらくも思わないけれど（母が）所在なく待っていらっしやるであろうと（思うと）悲しゅうございますので、近くで（母を）養いたいと思つて見ていたのです。（私が）死んでしまったなら、親もきつと死んでしまいなさるでしょう。私の身体の中で親を養うのに必要のない所があるなら差し上げよう。（しかし）足が無かつたらどこに歩いていけようか、いや、どこにも行けない。手が無かつたら何で木の実や、葛の根を掘ろうか、いや、掘ることはできない。口が無かつたらどこで心を通わせようか、いや心を通わせるにははばきない。」腹や胸がないならどこに心が宿ろうか。この中で不要な所は、耳たぶと、鼻柱だけであつたよ。これを山の王（であるあなた）に差し上げよう」と涙を流して言うのと、牝熊と牡熊は、荒々しい心無くして、涙を流して親子の情愛を知つて、二頭の熊は子供を引き連れて、この木の洞穴をこの子に譲つて、他の峰に移つた。